

松川町農業振興会議・松川町ゆうきの里を育てよう連絡協議会
合同会議 会議録

日時：令和4年6月2日（木）PM3：30～5：45
場所：農村観光交流センター みらい

出席者

町長、議会2名、農業委員会の代表3名、
みなみ信州農業協同組合の代表2名
生産者組織の代表8名（3名欠）、女性農業者の代表3名（1名欠）
ゆうき給食とどけ隊2名（1名欠）、直売所、教育長、
栄養士6名+1名（2名欠）商工会長
アドバイザー 吉田太郎

事務局

南信州農業農村支援センター 木下倫信 JA松川支所営農課課長 坂巻 勲
町産業観光課長 田中学
農業振興係 宮島公香・小沢香織・原恵・佐藤光吉・下平隆司・佐藤広利・橋場幸子
農林係 米山敏・宮澤風香 建設水道課長 原高広 農地整備係 後藤正雄（欠）

1. 開会：田中課長
2. あいさつ：宮下町長

合同会議ということです。ちょうど南信州のコロナの警戒レベルが2に下がったというので、これほどの人数が集まるのは2年半ぶりである。地域のことが進まないといけけないので、しっかりお話いただきたい。

今回の趣旨は課題の共有である。松川町は農村地域だが農業者数が減っている。遊休農地も増えている。そこで、本腰を入れてやってもらいたいと思っている。また、環境保全型農業を進めてきたが、これを国はみどりの食料システム戦略という形にしている。ただ、これもほとんどの自治体が乗れていないので松川町は国内でも先進地として注目されている。16時すぎに次の会議があるので抜けるがよろしくおねがいします。

田中課長

今日は、アドバイザーとして吉田太郎先生にも来ていただいている。

3. 協議事項

進行：松下農業委員会長

事務局 宮島説明

- (1) R4 検討会の進め方について
- (2) 課題の共有

アドバイザー 吉田太郎氏から「温暖化回避に必要な農業」について説明

ヨーロッパでは二酸化炭素を排除するために自然エネルギーの導入に補助をする動きがあります。農産物価格が低迷し、後継者が後を継ぎたくない、そこに補助金を出しソーラーパネルを設置するとお金が出るという話があり、イタリアでは遊休農地にソーラーパネルが設置されるといった変なことが起こっている。自然エネルギーをすることはよいが、屋根の上でもできるのに、なぜ、わざわざ農地に立てるのかということになり、イタリア最大の農業組合が農地にソーラーを作るのはやめてほしいと申し入れを行っている。有機農業で農地を守っていこうとする話だったので、似ているなと思いました。

温暖化を防ぐ農業はなんなのかということ、改めて地産地消と山地酪農が大事じゃないかとおもっている。県の議会では中川県議がごみを循環させた温暖化防止を頑張ったかどうかと発言。農政部長は応援していく、有機農業も推進していくとして県でも考えているということです。国がなぜ、みどりの食料戦略を言い出したのかということ、温暖化で危機的状況ですが、窒素、リン、つまり農業が原因でかなり温暖化の問題があり、何とかしなければとなっている。歴史が好きな方はわかるかと思いますが、古生代と中生代を境にして地球上の生物が 95%絶滅している。原因は温暖化。恐ろしいことにその時の 10 倍の速さで今は、二酸化炭素が排出されています。国も環境に負荷をかけない農業への転換をとということで、その一つが有機農業ということでこういっている。

去年の 5 月に戦略を打ち出しましたが、今年の 5 月にはみどり法が施行されていて、超スピード可決です。着目しているのは、6 条第 2 項、消費者は有機農産物を選択しなければならないとあり、消費者に対して環境保全型の農産物を買うように法律が定められたことが大きい。この法律と合わせてグリーン購入法も改正され、農林水産省の食堂でも有機食材を利用しようとしている。

地球にやさしい農業、温暖化を防ぐ農業は何か？食品ロスが問題になっている。フランス、イタリアではスーパーの売れ残りはたい肥にする、家畜のえさにするなど義務付けられている。リサイクルをやっている OECD の国の中で日本はビリのほう。燃やしているごみが多いので、韓国に負けている。韓国は 95%リサイクルしている。たい肥として生ごみを循環させることが大切。消費者と生産が顔が見える、土づくりをして健康な食べ物を食べて健康になろうと、佐久総合病院の若月先生が提唱されていた。地域から出てくるものを循環してたい肥にしているということをしている。大町市の商店街、宿から出る生ごみを分解するたい肥センターがある。窒素肥料の値段が 40%上がると心配されるが、微生物を使ってのたい肥作りで栽培したほうが、化学肥料を使うより安いといった計算もされている。有用微生物+餌（繊維質）があるとよい。日本の有機農業のルーツは佐久にある。

どういう農業が地球に野菜いのかを紹介します。自然エネルギーに転換したときの温暖化を防ぐかといったグラフを見ると、食分野と、食品廃棄物をなくすだけで削減効果が大きいことがわかります。農業分野で見ると放牧、林間放牧が削減効果が大きい

いことがわかります。1 番は食品廃棄物をなくすことが大切、2 番目は食生活を変えること、3 番目が林間放牧。この3つをメインに話をします。

ごみのたい肥化ですが、ベトナムで有機農業をしている日本人の方に聞いた話ですが、ベトナムではメコンデルタで魚を育てることが最大の産業。飼料作物をアメリカから買って、魚の餌にしていたのを、ごみを昆虫に食べさせて、それを魚に与えることで、まさにごみが資料源になるということです。サーキュラーエコノミーに転換する世界が来ています。それよりも、出てくるごみを減らす食生活をしたほうが良いと、アップサイクリングが始まっています。あるレストランのシェフはフードロスをなくすために、農家のが旬に栽培したものを全量買い取り、それを全部使って調理を行っている。お客さんの評判もよい。農家の方は旬の時期に栽培する負担のかからない有機農産物を出荷し、シェフはその野菜を調理し、消費者は消費し還元する。デンマークは排出量を70%以上削減すると発表している。給食を有機にしたため、子どもたちが残さなくなり残渣が減った。いいものを食べた結果、医療費も減る。各国、有機がすすんでいる。地球全体のことを考えると、お肉を減らして野菜や果樹を食べるのが良いとわかっている。ジャガイモやリンゴをつくっていると地球環境にやさしいと出ている。

作物を大規模に作ったほうが二酸化炭素の排出量は少ないが、遠距離輸送で輸入した場合、二酸化炭素がたくさん出てしまうが、それはカウントされていない。実際は地域内で地産地消することがいかに大事かということが出ている。

また、森林に老木化すると二酸化炭素を吸収しなくなると聞いた。人間が手をかけないといけない。まさに農地も同じではないか。

米粉を使ったバームクーヘンなんかも作られている。地産地消が地球にやさしい農業ではないかと思っている。

有機農業も大事ですが、今回の合同会議では、後継者が減って遊休農地が増えているといった状況の中で、改めて地産地消が大事だと思う。遊休農地解消のためには、牛が有効ではないかと思っている。アグルフォレストリーというのが、世界的に注目されている。根羽村では山地酪農をやっている方がいらっしゃいますし、スペインではイベリコ豚が木の下でドングリを食べさせている農業がおこなわれています。ワンヘルスというのは、有機農業の開祖がアルファードハワードさんという方が、たい肥で育てたものを食べている子供は風邪をひかないといった。当時はまやかしではないかと言われていたが、ようやくそれがわかってきた。家畜と人間と環境は微生物を介して循環しているということがわかってきた。病原菌がきても病気にかからない。実験でたい肥で育てたイチゴやトマトと、そうでない育て方のイチゴやトマトに病原菌を与えたところ、有機栽培のほうは病気にかからなかったという結果が出ている。

人間でも免疫力がある人が病気にかからないといったことがあるが、それを介しているのが微生物だとわかってきたようだ。畜産をベースに、鳥インフルエンザ、コレラ、サーズなどヨーロッパの畜産業者の中から、除菌はやりすぎるとよくないのではと話が出てきている。福岡県ではワンヘルスが条例化されている。

松下会長 先生ありがとうございました。吉田さんはもともと東京都の職員だったところ、田中知事にヘッドハンティングされ、長野県へ来られて有機の普及に取り組まれていた。この3月に退職されたが引き続き松川町へのアドバイスをお願いしたいとして、今回もお話しいただきました。

質問等

ファーマーズクラブ宮澤

大地を守る会に出荷をしていた。小麦が除草剤を使っているとか心配な話も聞く中で、子どもを持つ親としてこういった取り組みはよいことと思いました。小麦の規制などはどうなっていくのでしょうか。

吉田さん ランドアップの規制ということでしょうか。ひどい状況です。情報が流れていない。農協の組合長がヨーロッパに視察に行った際、ヨーロッパでは規制が厳しくなり、ワインを処分しなくてはならなくなりました。どこに捨てようかと考えたとき、基準を緩めて輸入してくれる国があるということで、いい捨て場になったと聞いている。高度成長のころ東南アジアに対して日本はめっちゃめっちゃ経済力があつた。日本で使われなくなった農薬がどこへ行ったかというところ、東南アジアに売り、そこで生産されたものが日本に入ってくるという大変なことがあつた。日本のイチゴは東南アジアの人は買わない。危険な農薬を使っているからと。その農薬はヨーロッパから来ていて、日本が規制をゆるめているせい。小麦はウクライナの問題があつて、作付ができていない。手に入らない時期になる。米は余っているのだから、もう一度チャンスなのかと思っている。長野県に朗報なのは給食で使う小麦が、県産小麦と国産小麦100%になっている。

(3) 法人設立の目的 説明

意見交換

吉田さん SOFIX というのは立命館大学の久保さんのものですよね。現代農業に記事などが出ていますが、いきなり有機に着目すると、そんなのできるのか？という話になりますが、ゲノムとか解析技術が進んでいて、農家の方が感でやってきたことがかなり見えるようになってきています。土壌診断して実際に微税物のバランスを整えて、活性を上げてやると、いままで全然できなかった畑ができるようになる。なので、こういった調査をするのはよいことだなと思います。

松下会長 [農地を管理する法人では]水田なりがあるが、本町では果樹園も多いので難しい。

農業経営士協会宮澤 学校給食のことはわからないが、いま果樹園をやっている農家がいるのなら聞いてみたい。家族が朝から晩まで働いて、戦後の果樹景気の積立でやっと持っているようなもので、どこも儲かっていない。そうした中でこうした事業をやるのはいいけれども、果樹園でやるには心を鬼にしないと。補助金が頼りならばできると思うが、それがなければ難しいと思う。やったらいいと

思うのだが、また、メンバーの中に果樹園組織が来てもいいのかなど。そして、松川有機農業研究会の代表が「呼んでくれない」と悲しんでいた。野菜でやっていく農業地帯ではないので。果樹園でしっかりと経営できるメンバーを智恵として入れて欲しいと思う。

宮島事務局 農業振興会議に来ていただいたので次回は有機農業研究会も入れさせて進めたいと思います。他にも提案いただける方がいればと思います。

くだもの観光協会熊谷 「農業公社を立ちあげないと駄目だ」と訴えてきたが、当時は役場も研究してくれたがお金がかかるので町長も踏み出せず、結果として、まちづくり観光センターができたのだが、農業をしっかりとやっている人がおらないと観光も廃れていってしまう。非常に大事なので駄目だということではなく、是非少しずつ育てていただきたい。徐々に地盤ができつつあるので農業で食べていける地域になればいいなど。阿南町もふるさと納税でお米をあげているが、コシヒカリを2万円で買ってくれる。アトムという農業公社があるのだが、こうしたものがあってこそ地元農業も成り立つと。

(4) オーガニックビレッジ宣言について 説明

松下会長 国から本町にみえられた安倍ちゃんがいま有機の担当をやっている。私もびっくりしたのは全国的にも有名で、長野では飯田市と松川町だと。そして、飯田市長は市長がトップで推進しているが、地についての活動は我が松川町がやっておると。そこで、皆さんも積極的にやっていただきたいと。では、各団体から意見をいただきたい。

4. 各団体からの報告、提案について

JAより坂巻課長

令和3年の取組報告・令和4年度の事業計画ネクストアグリプランについて

令和4年度担い手支援事業について

1日農業バイトについて 6/10に説明会を予定しています。

総務産業建設委員長中平文夫 議会の総務産業委員長。こうした会議で勉強させてもらった。熊谷さんが言っていたが議会としても前向きに取り組んでいる。新規就農者の受け入れでも頑張っておる。農業就業人口が減っている。それは国民健康保健にも響いている。保健料が少しずつあがっている。議会としてもこの報告を課長からしっかりしていただいて共通認識でことにあたっていきたい。

総務産業建設副委員長大蔵洋 果樹で有機リンゴの手伝いをしている。SOFIXの勉強会にも参加しているが難しい病気もでるので収穫でも苦勞しているが、議会としてもできるだけ手伝えればと思っている。

農業委員会会長代理北林秀昭 農業委員会で農業振興は前向きに考えているが、有機農業の取り組みは委員自ら実践しているし、委員会としても支援している。農業法人

の設立も農業振興の面からも重要だと思っている。農業委員が先頭で進めている。農業振興では窓口でもあるので頑張っていきたい。

農業委員北沢ひろみ 4年前に[人農地プランで]団体を作って遊休農地でじゃがいもを作って給食に入れている。それは、大事な場にもなったし農業でいくしかないので新しい未来を築いていきたい。

JA 理事木下稔 農協の理事だがエコファーマーでもある。営農委員会もあるので意見をいただきながらやっていきたい。

JA 支所長古瀬聖史 先程、[JA の]坂巻から説明させてもらったが、有機とかけ離れたものも売っているので複雑な思いもあるが、牛久保さんのニンジンが美味しいし、小麦の話ではないが果たして高い食パンが安全なのかと思っている。地域の活性化に役立てればと思う。

ファーマーズクラブ宮澤明歩 ファーマーズクラブは35名の会員がいて先日も選果場で打ち合わせをした。かなり、いいリンゴができています。こうして頑張っているのは職人。うちは新矮化。効率化はできたが厳しい。現場の意見が重要である。それを大事にして欲しいなと思った。

若武者熊谷拓也 若手農業者の若武者は6人が入って総勢37人。若手の集まりがない中でこれまで活動できなかったが、町の財源や長野県の担い手育成基金でやっている。いろんな人間がいる中で有機にも興味がある人がいると思う。そういう人間もこういうところに参加していきたいと思う。また、若者マルシェもやっているが、今年は目的から考え直そう。町の子どもへの地域貢献や学びの場を作れないかと。そして、本日の吉田先生のアップサイクル話も近いかなと思っている。

農業経営士協会宮澤喜好 農業経営士協会。世界は農業への直接保障。トランプさんも最後は39%の補助金を出した。フランスも平均的な補助金は280万円。直接保障である。だからこそ、貿易が成り立つ。日本はトヨタを売るために農産物を輸入をしなければならない。

法人協会中平義則 法人協会。就農して以来、規模拡大している。いま10haやっている。全部が贈答用ではない。平らな畑は手を入れられるが、斜面は大変なので加工原料にしてもいいのかなど。加工用のリンゴや洋ナシ。いい畑は有機はリスクがある。そこで、加工用で減農薬をやってみる。そうすれば、加工で売りにできるのでそこで確立された技術をフィードバックしていくのがいいと思う。なお、私事だが「かんでんばば」と協力して防霜資材や液肥も開発している。みもり液を撒いているだけで5回の消毒を液肥だけで防いでいる。データが蓄積されると技術ができると思う。

くだもの観光協会熊谷宗明 55戸の生産者の集まり。この2年はバス、マイカーがゼロだったが、コロナが減少して観光がバスの予約、最盛期は3万人だが徐々に開いてきた。原田薫子さんも新入会員で桃を栽培すると。新規就農の指導もやっている。さて、学校給食に有機をすることは素晴らしいことでこの輪が広がることはありがたいし、自校給食ならでは飛躍するのではないかと。吉田太郎先生には講

演会をやってもらったり増野にも来ていただいたが、日本の有機農業の羅針盤として頑張ってもらいたい。なお、韓国は100%供給されている。なぜ韓国なのかも学ばなければならない。

農業振興会議委員のうち8人が増野なので。まさにRMOの方針は人農地プランの拡大。これから求められているのではないか。崇高な理念を考えることが大事ななど思っている。

農村女性ネットワーク寺沢圭子 農村女性ネット。主なことは梅ができると漬物講習会。研修旅行にいったりしている。今年は漬物とかいくつか事業を止めた。長野農ある暮らし相談センターの山村さんに旬の野菜でハーブを入れて実習しようとして計画している。主人が有機給食届け隊にも入っている。長ネギを提供している。ネギがよく伸びたのだが消毒は6月に有機で認められているもので消毒をしたら褒めてくれるものがよくできた。菌ちゃん先生ではないが土を育ててみたらいいのができたと思っている。主人が国内製造ではだめだ。国内産と書いてないと。納豆も外国さんは買ってくるなど煩くてたまりませんが会議に参加してその意味がわかるような気がしました。

JA 女性部吉沢良子 4月からで不安な面もあるのだが、皆さん素晴らしい活動をされているのだが、女性部での活動はできていないが、学校給食に有機給食を届けるとか有機の会があることは知っていたが。けれども中川村の友人から「松川町はすごいよね」と言われた。中川村が吉田(利俊)先生の講演をしたので行ってきたと。そこで、言われて松川町はそんなにすごいんだと嬉しくなりました。勉強させていたきたいと思えます。

ゆうき給食とどけ隊牛久保二三男 会長が田植えで忙しくてこれないので代わりに。吉田先生。JA、もなりん、行政の皆さんにこういった機会を作っていただいて感謝します。学んでいることをIターンでこられる方にもと伝えてかかわっていただける方を増やしたい。今後も環境にやさしい緑肥などを利用して有機を届けたい。

直売所もなりん松沢健史 もなりんの松沢です。4年度、6月に営業が再開できた。県外が7割。リピーターになる人が多いので。足を運んでいただけるような店舗づくりをしていきたいと思えます。

小平順一教育長 有機、自校給食は町が誇るべきものだと思っている。調理員さんとも面談したが、美味しいし安全・安心だし喜んで調理をしていると。だがいかんせん、不揃いなので大変だと。協力したい思いがあるのが、教育委員会として何ができるのか。作業が多い日は調理員を増やす。簡単にはいかないが、そうしたことで。これからも自校給食を大事にしていきたい。

町栄養士今井菜穂美 いま、健康を守る人の意識はあるのだが、多様化している。食べない子どももいる。学生の頃に食料自給率が低いことを勉強して、それがいまだに全然改善されていないので本当に不安だった。法人化だったり、農家の考え方が変わってきていてなんとなく安心した。有機の方も1住民として何をどう食べるかも大事だが、安全なものを食べるのが基本。それをやっているのも、とても嬉しい。

町栄養士浜岡翔子 中平委員からも話があったが肥満や高血圧が懸念されている中で、今日の話はとても野菜とか安全なもの入手するのは健康増進になると感じる。吉田先生の話にもあったが、国民は有機農法を務めて選ばなければならないと聞きましましたので仕事として住民の皆さんに働きかけていきたい。

中央小栄養士木下めぐみ 栄養が満たされない人に栄養を満たすのが栄養士の仕事だが、H14に食育基本法ができて給食がガラリと変わった。今までは提供するために安全安心であったのが、食育法ができてからは、子どもの体のために安心安全食べ物を提供して、健康で長生きできる子供を育てなきゃいけないといった任務を私たちは背負っている。今、有機のことを子供たちに伝えているが、将来この子たちが大人になったとき、昔のことを覚えていて、そして野菜を育てようかなと思ってほしいなという夢ができました。調理員さんと一緒にその夢をかなえるために、中央小給食室改造計画を立てている。

商工会長 小沢文人 農産物の加工をしている。有機野菜を取り入れるのは体験なんじゃないかなと思っている。野辺山など、現地を見に行くが葉物の上にチョウチョが飛んでいない。異常な光景である。防虫の消毒をされているのだが、これで、大丈夫なのかなとおもうが。仕入れで加工、製品の価値が決まってしまう。悪いものだと加工しようもなく、みんな廃棄。それはなかなか。有機、無農薬が難しい。消費者がわかってくれる人ばかりでない。形が悪いのがどうするか。だったら虫がついてもいいやと買う人はいない。有機は大変だと思いますが取り組んでいただいているので頑張ってもらいたいと思います。

建設水道課長原高広 農業農村整備事業、農業用水路、土地改良事業で関係している。産業観光課と横のつながりを大切にして一緒に進めていきたいと思います。

農業農村支援センター木下倫信 うちの支援センターも今年から重点課題で3年間モンパ病の対策、なしのプロジェクトを始める予定。生産量が減少しているので、生産力を維持したい。鳥取の産地再構築を参考に主産地について意見交換会をしている。そうした中で松川町は果樹研修生で2人が梨をやりたいということでやっているし、法人化の立上げの中で、地域を引っ張っていただくるような優良事例をこの法人の立上げに期待している。

まとめ

吉田太郎氏 今のお話をお聞きして、給食、販売、土地改良まで、ありとあらゆるところにまたがっているのだと感じました。ばらばらの話と、地球温暖化防止の話を取り結ぶキーワードは、農ではなく食。食べ物はすべてを網羅してるし、なおかつ誰もが使う。具体的に食べ方によって地球環境と係ることができる。虫が1匹いるだけでギャーとなったり、不ぞろいだと売れないといった厳しいお話もありましたが、まさにそれが日本の現状だと思います。ただ、このままいったらどうなるのか、新規就農者がいない、高齢化で後継者がいない、いままでのやり方ではどうしようもないということで、まさに転換期になっているんじゃないかなと思います。どうしたらいいのか、韓国では法整備

がされており、幼稚園から高校まで有機で無償の給食を実現しています。その結果、子どもが、給食が有機なのに家の食事は有機じゃないのかと意見がでて、スーパー等でも置くような転換期にきています。また有機は規格が不ぞろいで、先ほど小平教育長から人員を増やすといった話もありましたが、アメリカではそういった取り組みも行われている。子どもの舌が大切で、中川村も話題に出ましたが、素晴らしいカレーを作っている学校で、村出身の子が成人になったとき、あのカレーが食べたいねといった話になるそうです。ジャンクフードは食だけでなく、健康、環境、土壌、気候まで全部おかしくしてしまう。逆に言えば、食を変えるだけでそれを全部直すことができる。そのポイントは舌、味覚です。どう変えたらよいのかというと、もうからなければ無理だという話がでる。デンマークでは100%有機給食ができているのかというのと、1人当たりの有機食材に出すお金が、日本円で45,000円。フランスは17,000円。日本は1,400円。最新のデータでは540円です。これを45,000円にもっていけば日本は変わると思いますが、ヨーロッパは意識が高いからといった意見を聞きますが、日本では健康食品や栄養ドリンクに出しているお金を見るとヨーロッパ以上です。そのお金を牛久保さんの皮つきにんじんジュースで出していただけると、もうかっているなど感じて取り組む人が増えるのではないかと思います。実際に現実であり、フランスは学校給食で利用する割合が3%だったのが、わずか2年で3倍の9%になりました。それによって新規就農者も増えている。のフランスは、高齢化が進んでいる。遊休農地が増えている。このままだとフランス農業に未来はない。しかしこれを悲観的にとらえないでほしい。今までフランスは、葉漬けで間違った農業を行ってきた。そうしたものが減っていることはチャンスととらえてほしい。若い人、新しい有機農業を始めてくれ。フランス農業大臣は必ず増えるようにするからと言って、ゆうき給食で半分は購入するというのを義務付けたという話です。

閉会：時間の開催予定ですが、ゆうきの里を育てよう連絡協議会の第2回目は7月1日16：00からお願いしたいと思います。農業振興会議は7月末、夜の会議でと思っています。各団体から代表で出席いただいていますので、今日の内容を団体の皆さんにお伝えいただいて、協議いただいた内容等を次回の会へ持ち寄っていただけたらと思っています。